

(9) 第7回国際穂発芽シンポジウム－網走開催－

近年、北海道の小麦作は、穂発芽や雨濡れの影響による品質の劣化に悩まされています。穀物の穂発芽による被害は、古くから広く世界的に認められてきました。

1970年代の前半に、オーストラリアの小麦の研究者が働きかけて、カナダ、アメリカ、イギリス、スウェーデンの小麦研究者が集まり、穂発芽問題の解決を目指すことを申し合わせました。そこで企画されたのが、国際シンポジウムであり、第1回は1975年にスウェーデンで開催されました。

第6回のシンポジウムが、1992年7月にアメリカのアイダホ州で行われ、次の開催国として日本があげられ、そして網走市に決まりました。

このシンポジウムは、穂発芽に関わる各分野の研究者が、最新の情報を交換することを目的とするものであり、いつも150名前後の出席者が一堂に会して、一週間ほどの日程で開催されてきました。

第7回でも伝統的な様式に従い、網走市セントラルホテルを会場として、平成7年7月2日から7日までを会期として実施しました。アジアでの最初のシンポジウムであり、第1回から数えて20年目の記念すべき節目のシンポジウムでした。

研究発表に参加した人は120名で、海外からは15カ国43名の出席者があり、発表された演題数は71題、うち日本からは28題の発表がありました。研究内容が多岐にわたるため、次の4つのセッションを設けて、それぞれの分野ごとに発表して、討論を加えることにしました。

セッション1：穀物の加工品質と品質に対する穂発芽の影響

セッション2：種子の発芽と休眠の分子生物学

セッション3：穂発芽の遺伝と育種

セッション4：種子の発芽と休眠の生理学

出席者は、それぞれの分野の第1線で活躍している研究者で、先進的な手法を取り入れた研究の成果が発表され、活発な論議が交わされる毎日でした。とくに進歩が認められたのは、分子レベルでの穂発芽発生要因の追求、穂発芽の遺伝解析や抵抗性育種への応用などで、これらの成果は、将来穂発

芽問題の克服に役立つものと期待されています。

会期中の中日、7月5日には、現地検討会を実施しました。網走市近郊の畑作地帯を見学した後で、北見農試を訪れ、小麦と大麦の研究内容について、担当者から説明を受けました。海外からの参加者は、技術的に優れた畑作の実態や、農試における高度な研究に深い関心を示すとともに、熱心に質問をしていました。「平成7年7月7日」にシンポジウムが無事終了し、7の連続数字を思い浮かべながら、会の運営に係わった大勢の人たちと、喜びをともにすることができました。

シンポジウムで発表された論文は、第6回までと同様に、プロシーディング（英文）として、1冊の本にまとめられ刊行されました。ちなみに第8回のシンポジウムは、ドイツの小都市デトモルトで、平成10年6月に開催されました。日本からの出席者によりますと、網走を訪れた諸外国の研究者が、異口同音に網走での成果を高く評価するとともに、地元の人たちの温かい歓迎に感謝の意を表していたとのことでした。

ホテルを貸し切る形でのシンポジウムは、参加者の交流に大いに役立ちましたが、連日の論戦は緊張を伴うものでした。そのこともあって、7月4日にホテルでの昼食を済ませた後、参加者一同で「こまば木のひろば」(樹木園)を散策しました。会期の直前に、海外からの参加者のために、樹木の標識に学名を付け加えることになり、帯広畜産大学で保存してあった木製のラベルを借用したのです。そのラベルは、小麦研究の大先輩、木原均先生(故人)が1978年(当時85歳)から6年間、毎夏帯広に滞在して、大学の研究ほ場で小麦の研究に使用されたものでした。樹木園を一巡したところで、関係者からラベルの由来について説明があり、参加者一同深く感動したことは言うまでもありません。

<後藤 寛治>